補遺　本願寺の風景(1)

御影堂①

編集室

■本願寺の起源と御影堂

親鸞聖人が、弘長二年十一月二十八日（一二六三年一月十六日）に往生されると、京都東山の鳥部野の北、大谷に石塔を建てて遺骨を納めた。その墓所が簡素なものであったので、十年後の文永九年（一二七二）に、末娘の覚信尼さまは東国の門弟達の協力を得て、大谷の西、吉水の北の地に改葬し、六角の廟堂を建てて聖人の影像を安置した。その後永仁三年（一二九五）に、この大谷廟堂に親鸞聖人の木像（御真影）を安置したことから「大谷影堂」と称することになった。

徳力善雪筆『親鸞聖人絵伝』大谷廟堂の図。（本願寺蔵）

第三代覚如上人は、大谷影堂の寺院化を計られ、元亨元年（一三二一）には大谷本願寺と称し、御真影の南に本尊の阿弥陀如来像を安置したのは、次代の善如上人から綽如上人の時代である。ついで第七代存如上人の永享十年（一四三八）ごろに、御影堂のほかに本尊を安置する阿弥陀堂を別に創建して、ここに本願寺は御影堂と阿弥陀堂が東面して並立する両堂形式となった。その規模は、御影堂が五間四面、阿弥陀堂が三間四面で、その位置は北に御影堂、南に阿弥陀堂を配するものであった。

第八代蓮如上人の積極的な伝道によって本願寺の興隆をみることになったが、寛正六年（一四六五）、比叡山の衆徒によって大谷本願寺は破却された。その後、山科に本願寺を再興し、文明十二年（一四八〇）に御影堂を、翌年に阿弥陀堂を再建した。

この御影堂は、蓮如上人が三畳敷きの小御堂を建ててまで創意工夫を重ねたもので、入母屋造り檜皮葺の屋根で、間口十一間、奥行き十二間という広さで、内陣は押板形式を用い、参拝者の門信徒のために広大な外陣をとったものとなり、それ以降の浄土真宗寺院の特徴ともなった。

証如上人の天文元年（一五三二）に山科本願寺が細川晴元や法華衆徒に焼かれると、蓮如上人が建立した石山に本願寺の寺基を移した。始めは御堂が一つだったので、御真影と阿弥陀如来像を並べて安置した。やがて天文十一年には、従来の御堂を御影堂とし、阿弥陀堂を新造した。

次の顕如上人の永禄八年（一五六五）には前年に焼けた両堂を再建、御影堂は新築して瓦葺とし、阿弥陀堂は摂津郡山の御堂を移築した。天正八年（一五八〇）には、織田信長との十一年に渡る石山戦争を終結し、顕如上人は大坂本願寺を退去した。その後、紀伊鷺森、和泉貝塚、大坂天満を経て、天正十九年（一五九一）京都七条堀川に寺基を移した。翌文禄元年、天満にあった御影堂を移徙し、阿弥陀堂は新しく再建した。

■京都本願寺の御影堂の位置

京都本願寺が整備されて四年後、慶長元年（一五九六）の大地震で御影堂をはじめ諸堂舎が倒壊し、阿弥陀堂は被害を免れた。翌年、御影堂を再建するが、このときの両堂は大谷本願寺の伝統を踏まえて東面して建てられ、北に御影堂、南に阿弥陀堂が並立していた。ところが元和三年（一六一七）十二月二十日、浴室から出た火によって両堂をはじめ対面所などが焼失した。翌年、仮御堂を南向きに建立し、中央に御真影を安置し、東脇に阿弥陀如来像を安置した。同年十一月に阿弥陀堂を再建したが、御影堂がまだ建っていないので、この阿弥陀堂を御影堂に当てて中央壇上に御真影、茶所を阿弥陀堂として本尊を遷座した。

寛永十三年（一六三六）には、念願の御影堂を再建して御真影を動座したが、これが現在の御影堂である。その規模は南北三十一間余（約五十七メートル）、東西二十四間余（約四十五メートル）の大きさで、敷かれた畳は七百三十四枚、棟梁は水口伊豆守家久、大工は水口若狭守宗久があたった。このとき両堂の位置は逆転し、北（左）に阿弥陀堂、南（右）に御影堂が東面して並立した。これは、元和の火災後の仮御堂において、御真影の左脇に本尊を安置したことを踏襲したものであった。

これ以後、五十年ごとの親鸞聖人の大遠忌に際し両堂の維持修復を行ってきたが、親鸞聖人五百五十回大遠忌を迎えるに当り、損傷がはげしくなったので、文化七年（一八一〇）に骨組みだけを残して小屋組全体を解体するという再建と同様の大修復が行われた。

■平成の修復での発見

この度の親鸞聖人七百五十回大遠忌を迎える機縁に行われた御影堂の平成大修復では、中央屋根裏の梁下から四枚の棟札が発見された。それは寛永十三年の再建時における第十三代良如上人の「本願寺御影堂再興　寛永十三丙子期　八月二日　釈良如」と

このたび発見された４枚の棟札

大工と棟梁の棟札であり、また文化七年の大修復時の第十九代本如上人の「本願寺御影堂修復　文化七庚午年四月廿六日　釈本如」と棟梁の棟札である。また小屋組の解体作業で文化年間の寄進銘が見つかり、近畿を中心とした材木の寄進があり、寺院や門徒のほか「摂津十二日講」「備後御畳講」などの講社の名前などもみられた。

門徒や各地の講社の名前が入った寄進銘

御影堂は、広い外陣と五室に分れた内陣からなっていて、中央に御真影を安置する須弥壇と厨子が配され、天井や後壁とともに漆塗りや極彩色で荘厳され、森厳な雰囲気に満ちている。また御影堂の前方と左右には縁がめぐらされており、その外側に多くの軒支柱が並び立って、瓦の重量の負担を軽減し、軒の曲線ラインを安定感のあるものにするという本願寺の独特の意匠となっている。